

〔宇治拾遺物語七〕西宮殿○高明の大饗に、小野宮殿○藤原實賴を尊者におはせよとありければ、年老こ  
しいたくて、庭の拜えすまじければ、えまうづまじきを、雨ふらば庭の拜もあるまじければまい  
りなん、ふらすばえなんまるるまじきと、御返事のありければ、雨ふるべきよし、いみじくいのり  
給けり、その玄るしにや有けん、その日になりてわざとはなくて、空ぐもりわたりて、雨そ、ぎけ  
れば、小野殿はわきよりのぼりておはしけり、中嶋に大に木だかき松一本たてりけり、その松を  
見とみる人、藤のかゝりたらましかばとのみ見つ、いひければ、この大饗の日はむ月の事なれ  
ども、藤のはないみじくおかしくつくりて、松の梢よりひまなうかけられたるが、時ならぬもの  
は、すさまじきに、これは空のくもりて、雨のそぼぶるに、いみじくめでたうおかしうみゆ、池のお  
もてに影のうつりて風の吹ば、水のうへもひとつになびきたる、まことに藤波といふことは、こ  
れをいふにやあらんとぞみえける、富小路のと、顯忠○藤原の大饗に、御家のあやしくて、ところ  
どころの玄つらひも、わりなくかまへてありければ、人々もみぐるしき大饗かなと思ひたりけ  
るに、日くれて事やうくはてがたになるに引出物のときになりて、東の廊のまへに曳たる幕  
のうちに引出物の馬を引立てありけるが、幕のうちながらいな、きたりける聲、そらをひか  
しけるを、人々いみじき馬のこゑかなとき、けるほどに、まく柱を蹴折て、くちとりをひきさげ  
ていでくるを見れば、黒くり毛なる馬のだけ八きあまりばかりなる、ひらにみゆるまで、身ふと  
くにえたるが、いこみかみなれば、額のもち月のやうにて玄ろく見えければ、見てほめの、しり  
けるこゑ、かしがましままでなんきこえける、むまのふるまひおもだち、尾ざし、あしつきなどの  
こゝはと見ゆるところなく、つきぐしかりければ、家の玄つらひのみぐるしかりつるも、きえ  
てめでたうなんありける、さて世のするまでもかたりつたふるなりけり○又見二